

テキスト 出エジプト記 1章22節～2章10節

歴史を顧みない権力者の号令がエジプトのイスラエルを悪夢へ引きずり込む。ここに出現した闇の世界は、洪水前夜の罪に満ちた世界の再現である。そのとき神は世界の破滅を宣告された。ファラオを殺戮の衝動に走らせたのは恐怖であり、イスラエルを脅威と感じたエジプトの民族意識である。文化や習慣の異なる民族を多く抱えるのにも限界があると感ずる人々の意識はこうして歴史的なものとして証明される。しかし、イスラエル人を強制労働に服させるというファラオの対応策は裏目に出、彼らの人口はかえって増大した。そこでファラオの恐怖は嫌悪や憎悪にまで発展し、ついに大量殺戮の号令が下る。最悪の時代には最悪の人間が神の座につく（新約ではヘロデ）。

出エジプト記の初めに記される状況は「エジプトとイスラエル」という民族間の対立と図式化される。創世記の終りに向かう主題は、神の不思議な救いの御業による和解であった。兄弟同士の間にあった深い対立の溝は、ヨセフに対する兄たちの嫉妬であり、その後は彼を奴隷に売り飛ばした罪悪感であったが、それが神の導きの下に取り去られて救いが告げられ、イスラエルの家族は神の祝福の中に安息を見いだした。これはヤコブ＝イスラエルの家族内における和解である。当時のエジプトとイスラエルの関係は和やかで、宗教の違いが争乱のもとになる気配すらない。しかし、出エジプト記では、イスラエルは既に家族からひとつの民族へと発展しており、そこから今度はエジプトとイスラエルという民族単位の対立が生じる。イスラエルと世界との間の対立構造、すなわち、神の民と異邦人との関わりである。これがここから展開する旧約全体の主題の一つとなる。すると、既にここから終りも予想されていることに気付く。それは神を起源とする二つの兄弟であるエジプトとイスラエルの和解である（イザヤ書19章）。地上のあらゆる民族の対立が解消されることがこの先の歴史で目指され。従って、出エ

ジプトという出来事は大いなる出発である。世界に対する神の救済の御業がここから開始され、人類の真の和解を目指してイスラエルの歴史は長い旅に出る。

一人の男の子の誕生からそれは始まる。レビ人の夫婦に生まれたその子は母親がしっかりと防水加工を施した葦の籠に入れられナイルに漂う。「籠（テバ）」という特殊な語は、他では洪水の上を漂った「箱（舟）」にしか用いられない。それは大水からの救いをあらわす神の救いの器である。小さな命が神に守られて荒れ狂う波間を漂う。赤ん坊はついにファラオの娘に拾われ王宮へと運ばれるが、これは単なる幸運ではない。美しい（或いは健康な）男の子が命を狙われて親元から切り離される。それが、神の不思議な導きでエジプトの宮廷にまで入り込む。これは、ヤコブの息子ヨセフが辿った道のりと同じく神の摂理を物語る。ファラオはヨセフを忘れたが、神はイスラエルを忘れることなく、かつて示された道筋で新たに神の僕を起こされる。

「モーセ」という名はヘブライ語では「引き上げる」を意味するが、この名前にもヨセフとの共通点がある。ヨセフはファラオに迎え入れられたときに別のエジプト名を授かった。モーセは一つの名前だけが、その名は本来エジプト語で「息子」を意味しファラオたちの愛称であった。すなわち、モーセはエジプト名とヘブライ名の二つの名を重ね持つという点でヨセフと共通する。ヨセフはエジプトの宰相になり、ヤコブの家族とエジプトを救った。モーセもまたイスラエルを救うために神がお遣わしになる救済者である。そして、王の息子としての名をもつ、エジプトの王子となるはずであった。モーセはやがて来るべきお方の前触れとして、歴史に神が働きかけてくださる具体的なしるしとして旧約時代に示されたキリストの型を示す。

(牧野信成)

テキスト 出エジプト記 1章22節～2章10節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11

〔単元のねらい〕

主なる神は、ご自分の造られた世界を御手の中で支え、導いておられるお方である。『子どもカテキズム』問11に、神の全能と主権について、「神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません」とある。赤ん坊を川に流さなければならない。これは、理不尽なことであり、たいへん悲しいことである。けれども、このことも主なる神の支配の中に置かれていた。モーセはエジプトの王女によって引き上げられ、王女の子供として育てられる。そのようにして、神ご自身が歴史を紡いでおられる。わたしたち、また子どもたちにとっても、主なる神は愛をもってわたしたちと深く関わり、導いてくださるお方である。主なる神がおられることを驚きと喜びをもって伝えたい。

「神さまが引き上げてくださった」

ヨセフの時代に、ヤコブの家族、イスラエルの人びとすべてがエジプトに移り住みました。やがてヤコブとヨセフはエジプトで死に、その後も、イスラエルの人びとはエジプトに住み続けました。神さまは変わることなく恵みを注いでくださって、イスラエルの人びとはエジプトで増え広がりました。300年ほどの間、イスラエルの民はエジプトで祝福されて歩んだようです。

今日からは、モーセのお話になります。モーセをとおして、神さまが再び力強いみわざ、不思議なみわざを行ってくださいました。イスラエルの民を、今度は、エジプトから導き出して、もともと神さまがイスラエルの民に与えると約束しておられた土地、カナンへ導いてくださった。その出エジプトということを学びます。神さまの約束の地カナンへと帰って行く物語です。

神さまは、イスラエルの民がエジプトに向かう時にはヨセフを用いられました。今度、イスラエルの民がカナンへと帰るために、モーセが用いられます。先ほどの聖書の御言葉は、そのモーセが生まれたときの出来事です。

モーセが生まれたとき、イスラエルの人びとは、たいへんな中に置かれていました。モーセには、アロンというお兄さん、ミリアムというお姉さん

がいました。お兄さんお姉さんが生まれた時はまだよかったのです。けれども、モーセが生まれた時には、エジプトの王さまから命令が出ていました。「ヘブライ人（イスラエルの人のことです）に男の子が生まれたら、その子をナイル川に放り込まなければならない」。そういうおかしい命令が出ていました。そのため、モーセは、生まれてきても川に放り込まなければならない。そして、川に放り込まれるならば、普通は生きていられません。死んでしまいます。ですから、生まれてきても死ななければならない、モーセはそういう状況の中で生まれました。

もちろん、モーセのお父さんお母さんも、モーセを見捨てることなどできません。生まれてから三ヶ月ほど、何とか隠して育てました。アロン兄さん、ミリアム姉さんも協力しました。けれども、赤ん坊も三ヶ月くらいになってくると大きな声で泣くようになります。ハイハイし始めるようになります。だんだん隠しておくことが難しくなるのです。そして、ついに隠しておけず、ナイル川に放り込まなければならなくなりました。何と悲しく、つらいことでしょう。けれども、できることなら何とか生き延びてほしい。そう願って、お父さんお母さんはカゴを用意して、水に沈まないようにして、そのカゴにモーセを寝かせることにし

ました。ナイル川の葦の葉が茂っているところに置いて、川に流されてしまうことがないようにしました。少しでも長く生き延びてほしい。みんながそう願っていました。

ミリアム姉さんも、赤ん坊のモーセをかわいがっていました。カゴに寝かされて川に置かれたモーセのことが気になって仕方ありません。もしカゴがひっくり返ってしまったら！そう思うと気が気でありません。ミリアム姉さんは、遠くからモーセのカゴを見守ることにしました。

しばらくすると、エジプトの王さまの娘、王女がやって来ました。王女は、ときおり、そのあたりで水浴びをしていたのです。いつものように水浴びをしていると、何だか赤ん坊の泣き声がするではありませんか。王女は、召し使いの女たちと一緒に赤ん坊を探しました。カゴに寝かされたモーセが見つかりました。なんとまあ、かわいい男の子ではありませんか。王女はすぐに気がつきました。ああ、この子はヘブライ人の男の子なのだ。王さまの命令に従うために、カゴに入れて川に流されたのだ。そうであるならば、このまま放り出しておくのがよいだろうか。川に流してしまえばよいのか。いや、何とかかわいい男の子か。何とかかわいそうなことか。そう思って、王女は、自分が引き取って育てることにしました。こうして、モーセは川から引き上げられたのです。

遠くから見ていたミリアム姉さんは、モーセを引き上げたのがエジプトの王女であることに気がつきました。びっくりしましたが、王女がモーセを引き上げて、かわいそうに見つめているのを見て、勇気を出して飛び出して行きました。そして言いました。「お乳の出るヘブライ人の女の人を知っています。呼んで参りましょうか」。王女は答えました。「ありがとう。そうしてください」。ミリアム姉さんは、さっそく家に帰って、モーセのお母さんを連れて来ました。王女は、ミリアム姉さんが連れて来た女が実のお母さんであると気

づいたでしょうか。きっと気づいたでしょうね。それでも、王女は言いました。「この子を連れて行って、わたしの代わりにお乳を飲ませて、世話をしてください」。モーセのお母さんは、王女からモーセを育てよう命じられ、何と驚き、また喜んだことでしょうか。

こうして、川から引き上げられたモーセは、エジプトの王女の子どもになり、しかも、実のお母さんに引き取られて、育つことになりました。たいへん不思議な仕方ですけれども、神さまは、不思議な仕方で、人に生きる道を与えてくださいます。人間の思いを超えた神さまご自身の方法で、生きる道を切り開いてくださいます。エジプトの王女が引き上げたのですけれども、実は、主なる神さまがモーセを引き上げたのです。

ナイル川は、豊かな収穫を与える豊穡の神と呼ばれ、礼拝されていました。川が礼拝されるとは不思議なことですが、ナイル川に流されて、モーセの命はナイル川が支配することとなった。そのところで、イスラエルの神は、そのナイル川の支配の中からモーセを引き上げて、救い出してくださいました。イスラエルの神は、エジプトの神、偽りの神々に勝利しておられる、力強いお方です。やがてイスラエルの民は、エジプトに勝利して荒れ野に旅立ちます。すでにその勝利が、このモーセの誕生の時に始まっていたのです。

わたしたちにとって、神さまは、このようにして力強く働いてくださるお方です。わたしたちを愛して、決して見捨てない神さまがおられ、わたしたちの周りに起こることの一つひとつをご存じで、支配しておられます。悪いことが起きても、よいことへと造り変えてくださいます。このような力強い神さまがおられ、この神さまを信じることができるのは、何と幸いなことでしょうか。この神さまを信じて歩みましょう。（望月 信）

〔今週の暗唱聖句〕 ローマの信徒への手紙 8章28節

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、
万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。

〈ねらい〉

神様が、苦しみや悲しみから引き上げてくださることを知るように。

〈暗唱聖句〉

かごの中の赤ちゃんを「水の中からわたしが引き上げた」。

〈展開例〉

①ヨセフの計らいで、ヤコブさんの家族は全員エジプトに住むようになりました。エジプトの人たちとも親しくなって、イスラエルの人々は国中に広がりました。しかしそれからずいぶんたって、ヨセフさんのことを知らない王さまが現れると、急に怖くなりました。「イスラエルの人たちはあまりにもたくさんになった。もしかすると私たちの敵になるかもしれない。気をつけるにこしたことはないな。そうだ。厳しい仕事を与えれば、苦しくてこれ以上増えないかもしれない」。

②そう思った王さまは、イスラエル人たちを無理やり連れて行って町の建設現場で働かせました。そこは、熱くて、重くて、休む時間も食料もほとんどありません。イスラエルの人たちは「助けて。苦しいよ」と叫び声を上げています。でも神さまが守られたので、イスラエルの人たちはもっと増え広がりました。

③そこで王さまは考えました。「なかなかイスラエルの人々は減らないな。そうだと直接数を減らそう。生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め。女の子は生かしておけ」。大変なことになりました。国中にイスラエルの人たちの悲しみと叫び声が広がりました。

④そんな中で、レビの家に一人の男の子が生まれ

ました。とっても美しい子です。家の人は王さまの命令を知っていましたが、かわいそうで、三ヶ月間、家の中で隠して育てました。しかし赤ちゃんはすくすく成長し、声も大きくなってきます。これ以上隠しておくわけにいきません。そこでパピルスのかごにアスファルトとピッチで水が入らないようにし、その中に男の子を入れてナイル川の葦の茂みにそっと置きました。お母さんは、「この子をエジプト人が拾ってくれたら、命は助かるかもしれない」。そう考えたのです。その様子をお姉さんは草陰でじっと見ていました。

⑤そこへ王女さまが水浴びをしにやってきました。「アーン、アーン」。「あれ何かしら。赤ちゃんの鳴き声が聞こえるわ。あ、あそこのかごの中に赤ちゃんが」。抱き上げると、それはかわいいい男の子でした。王女さまは、王さまの出した命令に心を痛めていましたので、この子を育てる決心をしました。この子は「水の中から私が引き上げた」ので、モーセと名づけましょう。そして王宮で大切に育てました。

⑥モーセはこのあと、どうなるのでしょうか。そしてエジプトで苦しめられているイスラエルの人たちはどうなるのでしょうか。大丈夫。神さまはすべてをご覧になって、御心に留めておられます。そして、モーセを通して、素晴らしいやり方で、苦しみの中から引き上げてくださいます。

〈お祈り〉

すべてを知っておられる神さま。どうか苦しんでいる人を助けてください。悲しんでいる人を、涙の中から引き上げてください。そのために私を遣わしてください。アーメン。

〈ねらい〉

神様は私たちの毎日を導いてくださるお方、そしてこの大きな歴史の中で働いておられるお方であることを知る。

〈はじめに〉

クラスには数少ない子供しかまだ与えられていないかもしれません。でもこれから主はどのような子どもを与えてくださろうとしているのかわかりません。一人のキリスト者として、今、目の前に主が与えてくださった子どもに、小さなわたしの全てを通して福音が伝えられ、またこの福音が次の世代にも伝えられていくことを信じながら、子どもの前に立たせていただきます。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①王様ファラオは、全国民に、赤ちゃんを殺せという命令を出しました。その赤ちゃんは男の子ですか。女の子ですか。
- ②どこの川にほうり込めと命じましたか。
- ③ある時に男の赤ちゃんが生まれました。家族は隠しました。でもだんだんと大きくなったので隠せなくなりました。家族はどうしましたか。

〈展開例〉

ヨセフさんが死んで、長い時間がたちました。その間に何人も王様が変わりました。そして、ある王様が「イスラエル人の男の赤ちゃんは全員ナイル川にほうり込め。殺してしまえ」という残酷

な命令を出したのです。イスラエルの人たちはエジプトで奴隷として一生懸命働いて、そして、人数も増えてきたので、王様は怖くなってきたのです。だから男の赤ちゃんを殺してしまおうという恐ろしい命令を出したのです。

あるイスラエル人の家族に男の赤ちゃんが生まれました。その家族は絶対に赤ちゃんを殺したくありませんでした。そこで葦を編んで作った籠に赤ちゃんを入れ、ナイル川の茂みにそうっと置きました。

その赤ちゃんを見つけたのがなんと、あの恐ろしい命令を出した王様の王女だったのです。王女は、その赤ちゃんを見つけて、かわいそうに思って、自分のこどもとして育てることにしたのです。しかもその赤ちゃんにミルクを与える役目として、本当のお母さんをそばに置きました。こうして、この殺されるはずだったイスラエル人のある一つの家庭から生まれた赤ちゃんは、王様の家族として、大事に育てられたのです。

この赤ちゃんの名前を「モーセ」と言います。モーセさんは大人になってから、神様のために働く大事なお仕事が用意されていました。だから、神様はこのような特別な方法で、モーセが殺されないようにお守りくださったのです。

〈お祈り〉

神様、私たちも神様にご用意されたお仕事ができるよう、今からお守りください。そして、神様がどんなことがあっても助けてくださることを信じさせてください。



〈ねらい〉

人間が考え出すいかなるドラマよりも劇的な、神の歴史創造の妙に、共に驚く。

〈展開例〉

ヨセフさんの山あり谷ありの人生をずっと学んできました。一時は牢獄にまで入れられたのに、まさか総理大臣のようになってしまうなんて。そんなドラマがあったら、「ありえなーい」って言っちゃいそうですね。でも神様の救いの物語は、人間が考える以上にドラマティックなのです。聖書にはそういうお話がずっと書かれている。だから最高に面白いのです。

さて、ヨセフの人生も山あり谷ありでしたが、神の民イスラエルの歴史はそれ以上に山あり谷ありです。ヨセフさんのおかげで命拾いした兄弟たちは、その後一族全員を引き連れて、エジプトに移り住んだと教えてもらいましたね。そしてどんどん数が増えていった。幸せの絶頂ですね。いい感じです。

でもこの後急降下します。エジプトの王様が、「このままではあいつらが強くなりすぎる……」と警戒して、苦しい重労働をさせて、イスラエルの人々を虐待しはじめたのです。でもまだまだイスラエルはへこたれません。それでもどんどん増えていく。するとエジプト王は、とんでもないことを言い出しました。「イスラエルの人々に男の子が生まれたら、一人残らずナイル川に放り込め!!」……さあ大変、最大のピンチです。

そんな時に生まれてきたのがモーセでした。このモーセは、やがてイスラエルの人々をカナンの地に導くために神様が遣わしてくださった大事な人だと教えてもらいましたね。でもそんなモーセが、よりによってこんな大ピンチの時に生まれてくる。エジプト王が、イスラエルを導く神様の手を、必死になって邪魔しようとしているのです。

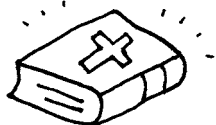
その結果はどうなったか……？ それは説教で聞きましたね。赤ちゃんモーセは奇跡的に命を助けられて、なんとエジプトの王子として育てられることになりました。「ありえなーい!!」でも、誰でも考え付くようなことなら、神様じゃなくてもできます。ありえないからこそ、信じる値打ちがあるのです。

そんなわけで、ヨセフ以上に波乱万丈なモーセの人生がスタートしました。そしてそのモーセと共に、イスラエルの波乱万丈の歴史もいよいよ本格的にスタートします。そこには、いつも神様の見えない導きがあります。人間の思いを超えた、劇的な救いのご計画が進められています。

人間はいつも神様のご計画を邪魔しようとしします。赤ちゃんモーセが殺されかけたように、赤ちゃんイエス様も殺されかけました（マタイ2:16-23）。でもエジプト王やヘロデ王の狂気も、イスラエルにモーセを与え、全世界に救い主イエスを与えようとする神様の力を止めることはできません。どちらの時もたくさんの子どもたちが死にました。たくさんのお血が流され、涙が流されました。神様はその悲しみを全部見ておられます。だからこそ、その悲惨の泥沼から人間を「引き上げる」ために、どれだけ罪人に邪魔されようが、神様は力づくで救いを進めていけます。あなたという人の小さな歴史にも、そんな劇的な導きが必ずあります。

〈祈り〉

神様、あなたのお考えになっていることは大きすぎて、とても想像がつきません。あなたはすごい方です。そんなあなたが、私の神様になってくださったことを感謝します。イスラエルの歴史を導いてくださったあなたの手が、私をいつも守り導いてくださいますように。あなたを信頼します。



〈ねらい〉

モーセに与えられた救いから、自分に与えられている救いを確認する。

〈展開例〉

①今日から、モーセによってイスラエルがエジプトより救い出される、出エジプトの物語。ヨセフのもとで神様の恵みによって潤ったエジプト。しかし、エジプトは、その身に受けた祝福を忘れ、繁栄するイスラエルを憎み虐げるようになる。そんな時代に、神様はイスラエルを救い出しかつてアブラハムに約束したカナンの地に導くため、モーセという指導者を選びだされた。今日は、このモーセの出生に示された神様の救いを覚えたい。

②モーセは生まれて三ヶ月の後に、イスラエルを恐れるエジプトの王ファラオの命令のために、ナイル川の上を籠に乗せられて漂っていた。ナイル川はエジプト人にとって自分たちに豊穡を与える神と信じられていた。本当の神様のことを認めない人々の国で、偽物の神に流されるがまま、生まれてから死に向かって漂い流れていく人生。モーセはそこから救われる。そして、これは君たちにも同じように言える。皆は本当の神様のことを認めようとしないうちで生きている。神様を認めない人間の造り出す社会や文化は、そこに生きる人を神様が嫌われるような生き方や考え方のとりこにしようとする。

Q. 皆が暮らすこの社会には、神様が嫌な思いをするような文化が無い？ 君が好きな小説やマンガ。テレビ番組やゲーム。こうしたモノの中に、君を神様から引き離そうとする考え方はないか。こうしたモノに、君が「カッコいい」と感じるとき、そこには神様が嫌われる生き方や考え方はないだろうか？ 人間は自分の力で

どこまでも成長できるとか、自分の信念や夢が世界で一番大事とか。「神など俺には必要ない」。こんなキャがまるでカッコ良いかのようにいたるところに現れる。人間が一番という人間至上主義の国で皆は生活している。だが、その価値観に流されて辿り着くのは、神様から「お前には必要ない」と拒絶される永遠の死である。神様から拾い出されないなら、私たちの命は絶望的である。

③モーセの話に戻ろう。神様はエジプトの王女を用いるという仕方、モーセをこの死地から拾い上げられ、かつイスラエル人の母親の手によって育てられていく。これにより、モーセはエジプトを良く知るイスラエル人として出エジプトのために整えられていく。モーセは神様を知らない人の価値観に触れつつも、本当の神様を主人とする生き方を学んでいったに違いない。

④生まれてから死に向かって流れていく、人間を中心とした人生観。そのとりこになってしまう人生から君は神様に拾い上げられた。小さい頃から君が教会で何度も聞いてきた「救い」とは、ここからの救いである。そして、この救いを知る者が、やがて他の人々を救いへ導く者として用いられていく。モーセに対して、神様は様々な人を用いて、この救いを与えてくださった。君もまた同じである。神様は君を死に向かう川の流れから拾い上げるために様々な人を用いて、君を人間至上主義の人生から救い出される。この神様にこの身を委ねたい。

〈祈り〉

死へと流れる私を拾われた神様。感謝します。どうか、人間を一番にする価値観のとりこにならないようにお守りください。アーメン。